

研究論文

## 三重大学生の短期海外研修の成果と海外への意識 ー 海外フィールド研修を実施して ー

松岡知津子・奥田 久春

### **Achievements of Short-Term Overseas Training Programs and The Attitudes Toward Overseas Activities for Mie University Students: Through the Implementation of Overseas Field Training Programs**

MATSUOKA Chizuko, OKUDA Hisaharu

#### 〈Abstract〉

This report presents the results of the Vietnam Field Study, which has been conducted at Mie University for many years, based on the questionnaire of Japan Student Services Organization (JASSO) and the author's own questionnaire, focusing on the students' objectives, learning, and changes after returning to Japan. Analysis of the survey results revealed that the following communication-related items showed particularly strong growth: "I can create a comfortable environment for others to talk and elicit appropriate opinions," "I can organize one's opinions in an easy-to-understand manner and convey them accurately so that others can understand," and "I can actively communicate in an effort to convey meaning even if one's foreign language skills are insufficient. And these results are consistent with the goals of this class. It was also found that students' awareness of international exchange increased after returning to their home countries and that they are involved in various international activities such as tutoring international students.

キーワード：海外研修、JASSO、海外に対する意識、国際交流、異文化間能力

#### 1. はじめに

「三重大学海外フィールド研修」は、過去 10 年以上において本学で実施されてきたベトナムフィールドスタディ（以下、VFS とする）を 2022 年度に教養教育・教養統合科目「国際理解実践」（2023 年度より共通教育・教養基礎科目「国際理解実践 3」）として開放したものである。全学部生に対して開放されている科目であり、後期の集中講義として前半を本学における座学とし、後半を現地学生との協働学習という形で実施するものである。2022 年度は独立行政法人日本学生支援機構（以下、JASSO とする）の支援を受けることができた。

本稿は、2022 年度 VFS に参加した学生がプログラムの実施によってどのような成果が

見られたのか、またどのような国際交流に関心を持つようになったか等を JASSO のアンケートおよび筆者らが独自に実施したアンケート調査を手掛かりに見ていく。そして、今後のプログラム実施の参考としていきたい。

以下ではまず本科目の概要、学修の目的および学修の到達目標、授業の流れについて概観する。

### 1.1. 「三重大学海外フィールド研修」の概要

授業の前半、つまり座学で行う授業では、現地に関する概要を理解したり、現地での交流に関する準備を行ったりするほか、オンラインによって現地学生との事前の交流も行う。そして後半では、実際に現地を訪問し、協定締結校であるホーチミン市師範大学の学生とともに授業で交流しながら、グループごとに設定した調査テーマについて日本語でディスカッション、準備、調査を実施し、成果発表を行う。

### 1.2. 学修の目的および学修の到達目標

本科目では、異なった環境・背景を持つ協定大学の学生について理解し、協働して調査を進める。このような能力を身につけるには、協定大学の学生に対して自分たちのことを説明する中で、日本社会や文化について客観的に見つめなおすことが不可欠となる。座学による授業と現地での実習を通して、このような能力を身につけることを目指しており、海外の大学生との交流を通して、より広い視野を持って異文化間におけるコミュニケーション力を高めることを目指す。

### 1.3. 本科目の流れ

上述の通り、本科目は前半を座学、後半を現地訪問としたが、表 1 のように全 8 回の講義および演習を行った。

表 1 事前授業の日程および内容

	日程	授業内容	課題と提出期限
1 回目	10/5	オリエンテーション、自己紹介	
2 回目	10/26	海外渡航についての説明 三重紹介グループごとの話し合い フィールド調査準備	
3 回目	11/16	ベトナム語会話 (1) 三重紹介グループごとの話し合い フィールド調査準備	

	日 程	授業内容	課題と提出期限
4 回目	11/30	ホーチミン市師範大学についての学習 フィールド調査準備	
5 回目	12/7	ベトナム語会話 (2) フィールド調査準備	課題①提出期限
6 回目	12/21	ベトナム語会話 (3) フィールド調査準備 コミュニケーションについて (講義)	課題②提出期限
7 回目	1/18	ホーチミン市師範大学とのオンラインによる事前打ち合わせ	
8 回目	渡航前	ベトナム社会と歴史について 海外渡航に関する安全講習、渡航準備	課題③提出期限

ベトナム語会話 (1) ～ (3) は、ホーチミン市師範大学より本学に留学しているベトナム人学生 2 名に授業を依頼して行った。また、課題①とは、現地訪問時に日本語授業で行う三重文化紹介についての資料をグループごとに提出するものである。また、課題②は、3 回目、5 回目、6 回目に行ったベトナム語授業で学んだ内容に関する課題を録音し、提出するものである。そして課題③は、グループごとにフィールド調査計画書を作成し、個人の担当箇所を説明したものを提出するものである。いずれも Moodle に提出することとした。また、ベトナム訪問の前に成績評価を行う必要があることから、上記課題等により、評価を行うこととした。

次に、以下の表 2 に現地を訪問して行ったプログラムの日程を記す。

表 2 ベトナム訪問の日程

	日 程	内 容
1 日目	3/5	午前：中部国際空港出発 午後：ホーチミン市タンソンニャット空港着、ホテルへ移動、オリエンテーション
2 日目	3/6	午前：開講式 午後：フィールド調査に向けたグループ活動
3 日目	3/7	午前：フィールド調査のためのグループ活動 午後：三重紹介①
4 日目	3/8	フィールド調査のためのグループ活動
5 日目	3/9	午前：フィールド調査のためのグループ活動 午後：日本語学習および日本文化紹介②

	日 程	内 容
6 日目	3/10	午前：発表準備 午後：ATY 高等学校、Newtatco 技能実習生日本語センター訪問
7 日目	3/11	午前：APC 短期大学訪問 午後：戦争証跡博物館、統一会堂見学
8 日目	3/12	メコンデルタ観光（自由参加）
9 日目	3/13	午前：最終発表会、修了式 午後：ホーチミン市タンソンニャット空港国内線出発ハノイ行
10 日目	3/14	午前：ハノイ空港発 中部国際空港着

上記の日程中、移動日である 1 日目と 10 日目を除くすべての日程において、三重大学生とホーチミン市師範大学の学生が交流を行いながら活動を行った。次に、本プログラムの参加者と参加当時の学年、学部を以下に記す。

表 3 ベトナムフィールドスタディ参加者の所属学部及び学年

学年	人数（名）	学 部
1 年	6	人文学部、教育学部、生物資源学部
2 年	5	人文学部、生物資源学部
3 年	3	人文学部、教育学部、生物資源学部
4 年	2	人文学部

表 3 が示す通り、1 年生の参加者が最も多く、次に 2 年生が多かった。本授業は全ての学部生に開放しているが、2022 年度は医学部と工学部の参加者はなく、人文学部 5 名、教育学部 3 名、生物資源学部 8 名であった。また、別稿で述べる通り、2、3 年生の中には、前年度までにオンラインによる VFS に参加した者も 4 名含まれている（奥田・松岡印刷中）。

## 2. JASSO アンケートの結果

本節では、プログラム実施前後に実施した JASSO のアンケートについてみていく。まず、本授業が支援を受けた奨学金について、JASSO ホームページには、以下のように記載されている。

日本の大学、大学院、短期大学、高等専門学校（専攻科を含む。なお第2年次以下を対象とするものを除く。）または専修学校（専門課程）（以上の学校を総称して「在籍大学等」という。）が、在籍している学生を、諸外国の高等教育機関等（以後、「派遣先大学等」という。）との学生交流に関する協定等に基づいて、派遣先大学等に8日以上1年以内の期間派遣するプログラムを実施する場合、そのプログラムを支援し、資格・要件を満たす学生に奨学金を支援する制度です。（JASSO ホームページ 海外留学支援制度（協定派遣）より）

この支援を受けるために筆者らが2021年度に大学を通じて申請を行い、15名分の支援が得られることとなった。そして、本授業の参加者全16名のうち、要件を満たす15名が支援を受けることができた。支援対象外となった1名に関しては、本学の国際交流推進事業経費からJASSOとほぼ同額の支援を行うこととした。

JASSO 奨学金が得られることとなった学生は、留学前オリエンテーションやインターンシップの経験の有無、過去の海外旅行の経験、語学力等についての質問や、海外研修への留学目的、支給金額について等のアンケートが実施されたほか、2. 3. で詳しく見ていくように、開始前および終了後に回答するアンケートも行われた。これは奨学金を得た15名の学生全員が回答した。本稿では、その中から本研究に関わる留学目的に関する質問と、留学内容・成果に関する質問、そして留学前後のアンケート23項目についてみていく。特に23項目のアンケートに関しては、参加学生の異文化間能力を問うものであると考えられ、これは、本科目の到達目標とも一致している。

## 2. 1. 留学目的について

質問項目は「今回海外の大学等に留学する目的は何ですか。（語学力の上達、学位取得等）」であり、最大1500字以内の自由記述方式であった。回答は「単位取得のため」と回答した者が2名いたほか、「異文化理解」を目的としている者や、自分の専門分野に関わる目的を述べている者などがいた。異文化理解を目的としている者については、具体的に「多様な価値観を知り、視野を広げて、日本を今までとは違った視点で捉えられるようになること」、「海外の大学生と文化比較を行うため」などが挙げられた。また、専門分野との関連においては、具体的に「専攻はヨーロッパ・地中海地域だが、ヨーロッパの影響を受けている地域も多いため、その片鱗を見つけない」（人文学部生）や、「ベトナムと日本の文化・気候の違いを実感するため。気候の違いにより、生活にどのような影響が起こるのか調べたいと思う。また、育っている植物の種類や特徴について知りたいと思う。さら

に、環境問題に対してどのような取り組みを行っているのか、日本で導入できる取り組みはあるのか知りたいと思う。」(生物資源学部生) などが見られた。その他、ベトナムへの交換留学を検討しており、その判断材料とすることを目的としている者や語学力向上を目指す者もいた。

## 2. 2. 留学内容・成果について

質問項目は「留学中、意欲的に取り組んだ内容やその成果について具体的に記述してください。」であり、自由記述形式であった。意欲的に取り組んだ内容としては、コミュニケーションに関する回答が多かった。具体的には、「分かりやすい日本語を心がけた」、「日本語も英語も伝わらない状況でも、積極的にコミュニケーションをとるようにした」、「経験したことのないことに挑戦するのは苦手であったが、積極的に挑戦した」、「異文化の発見と経験だけでなく、現地で日本語を勉強している人達との会話を通じて、彼らがどのような点で苦労するのかを探ることも意欲的に取り組んだ」などである。また、留学の成果としては、「ベトナムの教育について調べ、日本の教育と比較して発表しました。実際に現地の小学校を見学することで、校長先生の教育に対する考え方に心を動かされたり、ベトナムでは、学校に昼寝の時間があるなど習慣の違いに驚いたり、子どもたちの元気に圧倒されたりと、とても貴重な経験ができました。」、「現地の調査では、小学校に訪れ、日本との教育の違いや学校生活についての違いを学んだ。また、校長先生からもお話を伺うことができ、自分が現在教育学部で学んでいる内容とも結びつけることができる有意義な経験ができた。」(教育学部生) や「公園が筋トレや美術・体育の授業で使われていた。日本では、公園を使用した授業が少ない。授業で学んだ植生などが身近な生活と関わっていることを実感するためにも公園で授業を行うことは良いのではないかと感じた。」(生物資源学部生) など、それぞれの専門分野に引き付けた回答が得られた。

## 2. 3. 開始前アンケートおよび留学後アンケート

回答はすべて 5 段階で行われた。例えば 1「自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる」に対して、「強くそう思う」であれば 5 を、「かなりそう思う」であれば 4 を、「少しそう思う」であれば 3 を、「どちらとも言えない」であれば 2 を、「そう思わない」であれば 1 を選択する。つまり点数が高ければ高いほど、質問項目の内容を満たしているということになる。

表4 JASSO 実施前後アンケート結果

	質 問 項 目	実施前 平均	実施後 平均
1	自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる	3.87	4.13
2	仲間に働きかけ、問題点を一緒に改善するために行動することができる	3.67	4.13
3	自ら目標を設定し、失敗を恐れず粘り強く行動することができる	3.87	4.13
4	自分なりに現状分析して課題点を具体的に提示することができる	3.80	3.73
5	課題に向けた解決プロセスを考え、計画的に実行することができる	3.47	3.60
6	既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい考えで、意見やアイデアを工夫して提案できる	3.60	3.80
7	自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるよう的確に伝えることができる	3.33	4.07
8	相手の話しやすい環境を作り、適切な意見を引き出すことができる	3.47	4.33
9	自分の意見ややり方に固執せず、相手の意見や立場を尊重して柔軟に対応できる	4.00	4.27
10	チームで仕事をするとき、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる	3.73	4.27
11	その場のルールや手続きに従って、自ら行動や発言を適切にすることができる	3.53	4.07
12	ストレス状況に置かれても、自分の成長機会だとポジティブに捉え、前向きに対処することができる	3.47	4.13
13	自分の文化背景の異なる場所または仲間とでも、リーダーシップを取ることができる	3.40	3.80
14	リスクがあっても、挑戦してみることが大切だと考え、実行することができる	3.47	4.00
15	不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる	3.80	4.47
16	自分とは異なる進行や文化的背景を持っている人を理解し、受け入れることができる	4.13	4.60
17	国内・海外を含めて、外国人との交流がある	4.07	4.53
18	専門分野の勉強へのモチベーションがある	4.13	4.20
19	語学の勉強へのモチベーションがある	3.93	4.40
20	留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある	2.80	3.73
21	政治・社会問題・国際関係について、知識・関心がある	3.47	4.00
22	社会での男女共同参画（男女平等）の重要性を認識している	4.00	4.33
23	将来の方向性・進路について、明確な考えを持っている	3.60	4.13



表 4 は JASSO の支援を受けた 15 名の学生の事前アンケートと事後アンケートの結果の平均値を記したものであるが、4「自分なりに現状分析して課題点を具体的に提示することができる」が 0.07 ポイント下がった以外は、全ての項目において留学後に上昇している。留学後に平均点が下がった項目 4 については、以下のように推測される。すなわち、留学前には現状分析をして課題点を具体的に提示するような場面が主に国内でのことに限られていたため、それほど問題に感じたことはなかったが、ベトナムを訪問し、現地の学生と協働学習を進めていくうちに、日本国内にいたときには遭遇しなかったような場面に遭遇したため評価が下がったというものである。

以下では、特に上昇率の高かった上位 5 項目について見ていくこととする。まず、最も上昇率が高かったのが 21「留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある」である。これは、プログラム実施前に平均 3.47 であったのが、実施後には 4.00 に上昇した。表 3 に記した通り、本プログラムの参加者は人文学部、教育学部、生物資源学部の 3 学部の学生から構成されているが、どの学生もベトナムに関連する専門ではない。事前授業において簡単にベトナムの歴史や地理、ベトナム語、ベトナム社会についての紹介は行ったものの、大半の時間をフィールド調査の下準備や現地で行う三重紹介、コミュニケーション等の準備に費やしたことから、事前の数値が低かったことが予想される。しかし、現地に渡って直接ベトナム社会を体験し、一定時間ベトナム人学生と過ごしたことで、知識や関心が増加したと考えられる。次いで、8「相手の話しやすい環境を作り、適切な意見を引き出すことができる」については、3.47 から 4.33 と 0.86 ポイント上昇している。また、続いて 7「自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるよう的確に伝えることができる」では、事前の 3.33 から事後の 4.07 へ 0.74 ポイント上昇しているが、これらの項目は、本プログラムの主な活動となるフィールド調査が大きく関係していると言えよう。フィールド調査では、日本語学部のベトナム人学生と協働して調査を行うことになっており、複数人で問題に取り組み、最終日の成果発表会に向けて調査や議論を重ねる必要があった。そのため、これらの能力が培われたものと推測できる。また、15「不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる」12「ストレス状況に置かれても、自分の成長機会だとポジティブに捉え、前向きに対処することができる」という項目については、ホテルやタクシー、買い物等では英語が必要となる場面もあった。例えば、ホテルではお湯が出ない等のトラブルにも自分たちで対処する必要があったため、これらの能力が培われたものと考えられる。



### 3. 実施後アンケートの結果

前節ではJASSOのアンケート結果をみたが、本節ではVFS実施後に筆者らが独自に行ったアンケート調査について記す。調査はVFSを実施して半年後の2023年9月にGoogle Formを用いて実施した。以下、調査結果を報告する。

まず、(1) VFSに参加した際の学年については、上述したため、ここでは割愛する。次に(2)「VFSの参加後、現地の学生と交流しましたか」という問いに対して、「はい」を選択した者が15名、「いいえ」を選択した者が1名と、大半の者がVFS終了後にも現地の学生と交流したことが分かる。続けて、(3)「(2)の質問で『はい』と答えた人はどのような形で交流をしました(しています)か」については以下の図1を参照されたい。

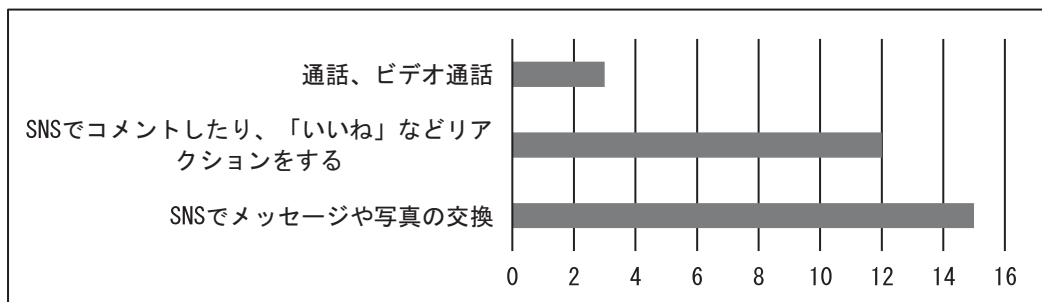


図1 VFS参加後の現地の学生との交流方法

図1が示す通り、「はい」と答えた学生15名全員がSNSを通して交流していることが分かった。また、少数ではあるが、一部通話をした者もいた。次に、質問(4)および(5)を続けてみていくこととする。

(4) ベトナムに行く前に、海外渡航に興味がありましたか。

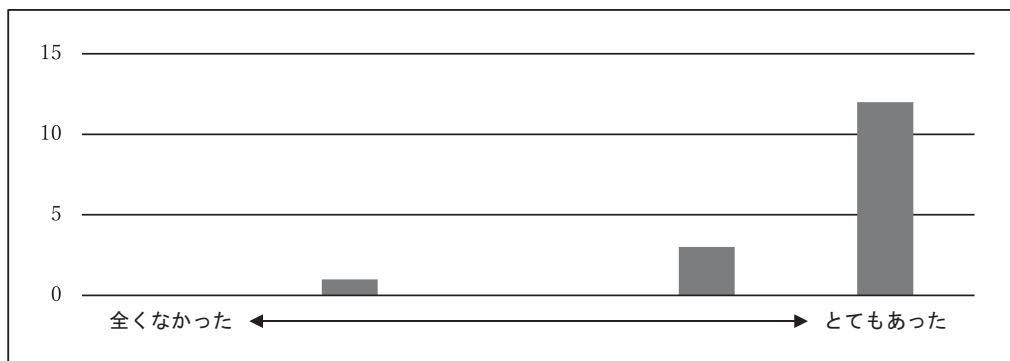


図2 渡越前の前の海外渡航への興味

(5) ベトナムに行ったことで、海外渡航への興味はどのように変化しましたか



図 3 渡越後の海外渡航への興味の変化

図 2 を見ると、大半の学生はベトナムへ行く前から海外渡航に興味があったことが分かる。1 名は、ベトナム渡航前に海外渡航への興味がありませんでしたことが分かるが、(5)の結果から、ベトナム渡航後、全ての参加者において海外渡航への興味が高まったことが明らかになった。また、(6)「ベトナムフィールドスタディの参加後、実際に海外に渡航しましたか（または、今後具体的に予定がありますか）」という問いに対して、「はい」と回答した者が 9 名、「いいえ」と回答した者が 7 名であった。つまり、半数以上の者が帰国後半年以内に再び海外渡航をした、または具体的な計画を立てていることが分かる。具体的にどのような渡航をしたかという問い (7) については図 4 が示す通りである。

(7) 「(6) で『はい』と答えた人はどのような海外渡航で行きましたか（行く予定ですか）」

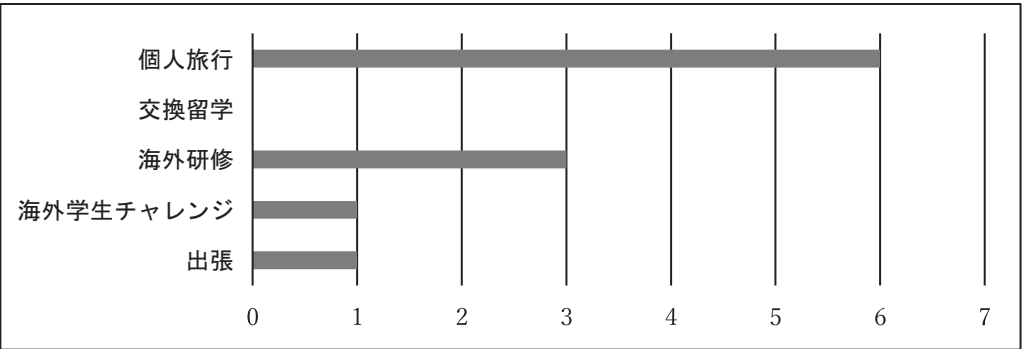


図 4 帰国後の海外渡航の方法

調査を行った 2023 年 9 月の時点では図 4 の示す通りであるが、その後 2024 年 1 月現在においては、交換留学が 0 名から 2 名へ、本学が独自に行っている「海外学生チャレンジ」が 1 名から 2 名へとになっている<sup>(1)</sup>。なお、交換留学予定 2 名のうち 1 名は、本プログラムで訪問したホーチミン市師範大学への交換留学である。(8)「(6)で「はい」と答えた人は、どこへ行きましたか（行く予定ですか）」という問いに対して、「ベトナム」と答えた者が最も多く、3 名に上った。その他、「韓国」が 2 名、「スペイン」、「ドイツ」、「台湾」、「パラオ」が各 1 名ずつであった。中には、半年の間に複数の国・地域を訪問した者もある。「ベトナム」と回答した学生の中には、再びホーチミンを訪れ、VFS で出会ったベトナム人学生と再会し、交流した者もある。また、(9)「VFS の参加後、国内での国際交流の機会がどのように変化しましたか」に関しては、「増えた」と回答した者が 7 名、「変わらない」と答えた者が 9 名いる。(10)「ベトナムフィールドスタディの参加後、どのような国際交流を行いましたか（複数回答可）」については、以下の図 5 が示す通りであり、「行っていない」と回答した者が 6 名いた。この 6 名について (11) で「(10)で「行っていない」と回答した人は、何か理由がありますか」と理由を尋ねたところ、全員が「行いたい、時間や機会がない」と回答している。

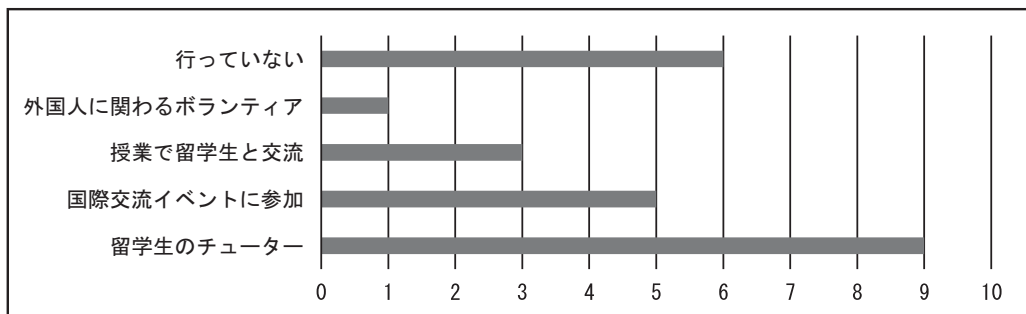


図 5 VFS 参加後に行った国際交流

図 5 から分かるように、VFS 参加後に行った国際交流として、最も多かったのが、留学生のチューターである。これは、新しく来日した本学の留学生に対する支援を行う制度であり、本学では来日から 2 か月間、上限 15 回まで行うものとしている。このような、学内でも活動可能な身近な国際交流に参加している学生が半数以上いることが分かった。(12)「VFS の参加後、ベトナムへの関心について、具体的にどのような変化がありましたか（複数回答可）」という問いに対しては、以下の図 6 のような結果が得られた。

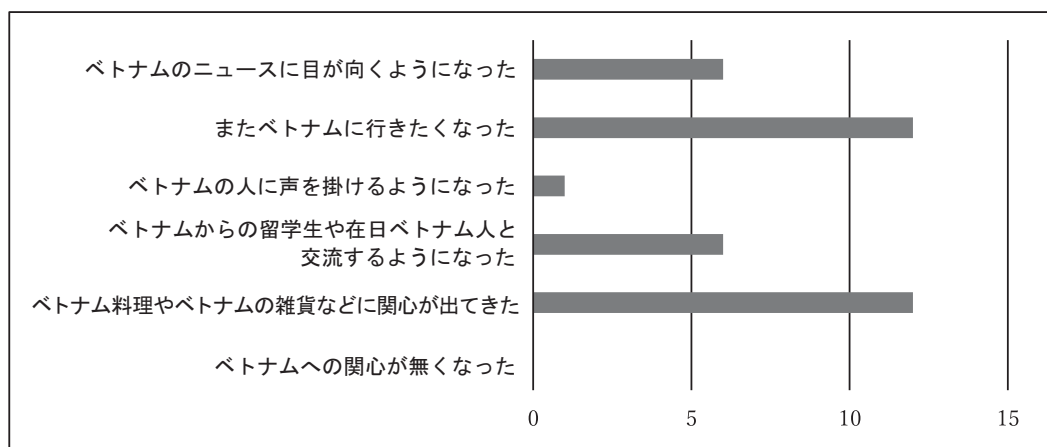


図 6 VFS 参加後のベトナムへの関心の変化

図 6 から、ベトナムへの関心が無くなった者はおらず、ベトナムへの再訪を望む者や、ベトナム料理、雑貨といった身近な物に関心が出てきたものが多いことが分かる。次に、ベトナム以外の国・地域への関心についても以下のように興味深い結果が見られた。

- (13) 「ベトナムフィールドスタディの参加後、ベトナム以外の国・地域への関心が、どのように変化しましたか（複数回答可）」

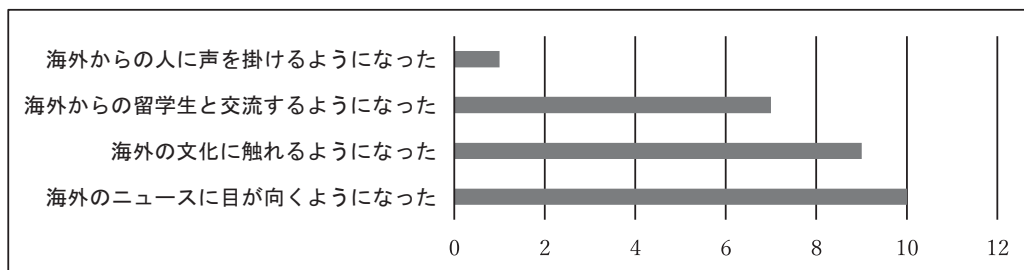


図 7 VFS 参加後のベトナム以外の国・地域への関心の変化

図 7 の結果から、ベトナムへ行ったことにより、ベトナムのみならず、そのほかの国・地域への関心も増したことがうかがえる。

- (14) 「その他、ベトナムフィールドスタディに参加したことで、何か考えるようになったことなどあれば、自由に記述してください。上記の質問と回答が重複しても構いません」という問いに対して、自身の専門に引き付けた学び、技能実習生日本語センターの見学等

を通して出会った人たちからの学び、また自分の変化等について記述する者がいた。以下にその一部を記す。なお、以下はすべて原文のままを記す。

ベトナムを含むアジアでの稲作の重要性を考えるようになった。現在私は稲作を研究する研究室に所属しており、稲作の研究を通じて世界の食料不足問題の解決に繋がたいと考えている。今までその対象はアフリカであった。しかしベトナムで毎日ベトナム料理を食べることを通して、ベトナム料理には米を使ったものが多いことや米を主食として食べていることを実感し、アジアの稲作にも目を向けるようになった。(学生 A)

技能実習生の送り出しセンター<sup>(2)</sup>に行き、実際に日本で働くために日本のことを勉強しているベトナムの方と出会って、日本の技能実習生問題についてより関心をもつようになりました。(学生 B)

技能実習生だったり、日本へ来ることを目的に日本語を勉強している人たちと出会ったので、日本にきた外国人の職探しに関して興味を持つようになった。(学生 C)

自分の中にあった固定概念が正しい意味で、覆されることばかりでした。百聞は一見にしかずを体感し、より積極的に行動するようになりました。また自分の中にある常識は非常に狭い範囲のものであり、まだまだ知らないことで世の中溢れていることを体感しました。(学生 D)

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、2022 年度に JASSO の支援を受けて実施した VFS について、JASSO のアンケートと筆者らが独自に実施したアンケートをもとに、学生の目的や学び、帰国後の変化についてみていった。その結果、「相手の話しやすい環境を作り、適切な意見を引き出すことができる」「自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるように的確に伝えることができる」「不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる」といったコミュニケーションに関する項目の伸びが特に大きかったことが明らかになった。これこそが、本科目で掲げる到達目標である。

また、実施後に筆者らが独自に行ったアンケート調査からは、海外への意識はもともと高かったものの、VFS 参加後により一層高まっており、ベトナムはもちろん、そのほかの海外への意識が高まっていることも明らかになった。そして、帰国後半年の時点ですで

にベトナムを再訪した者が 3 名、そのほか個人旅行や海外研修等さまざまな機会を利用し、海外を訪問している者が少なくないことも明らかになった。また、海外を訪問していなくても、留学生のチューターをするなど、国内にしながら国際活動を行ったり、ベトナム人を含む外国人とのコミュニケーションを積極的に行っている様子がうかがえた。今後も継続的にこのような調査を実施していくことで、VFS 参加者がどのように国際社会と関わっているのかを注視していきたい。

#### 注

- (1) 学生海外チャレンジとは、「学生海外チャレンジ応援事業」と言い、世界に飛び出して学業の達成やキャリア形成のための活動にチャレンジする学生の思いを応援する、三重大学独自の学生支援事業である。
- (2) 厳密には、「技能実習生の送り出しセンター」ではなく、「技能実習生日本語センター」である。

#### 参考文献および参考資料

- (1) 奥田久春・松岡知津子（印刷中）「オンライン海外研修を活用した現地海外研修の意義と可能性 — 三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に —」『三重大学高等教育研究第 30 号』
- (2) 日本学生支援機構 [https://www.jasso.go.jp/ryugaku/scholarship\\_a/haken/index.html](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/scholarship_a/haken/index.html)（2023 年 12 月 25 日閲覧）
- (3) 学生海外チャレンジ応援事業 <https://www.mie-u.ac.jp/international/abroad/index/>（2023 年 12 月 25 日閲覧）